

公共哲学2（担当：玉手慎太郎）

試験問題

◆以下の各問いについて、選択肢から一つ選ぶ形で解答してください（1問5点）。

（1）ロールズの社会契約の枠組みに対するサンデルの批判として適切なものは次のうちどれか。

1. 人々が同一のコミュニティの中でアイデンティティを育んできたという非現実的な想定の下で社会契約が組み立てられており、コミュニティの多様性を真剣に捉えていない
2. 社会契約にのぞむ個人として、納税や勤労の義務を免除された「負荷なき自己」が想定されているため、結果として利己的な原理が選ばれてしまう形になっている
3. ロールズの想定する原初状態にある個人は、自分のアイデンティティについての情報を遮断されているが、そのような個人には道徳的な判断をなすことはできない

（2）ウォルツァーが各コミュニティ内での民主主義の実践を擁護する理由として適切なものは次のうちどれか。

1. 自分たちで話し合って決定するということは、人類全体にとっての普遍的な「共通善」と言えるものだから
2. 各コミュニティ内で民主主義を実践することで、伝統的に続いていた差別や偏見についても問い直すきっかけを得ることができるから
3. 個々の文化に根ざした「ミニマルな道徳」を具体化していくためには、各コミュニティ内での民主主義が不可欠であるから

（3）ロールズのリベラリズムに対するオーキンの批判として適切なものは次のうちどれか。

1. 不偏性を実現するための「無知のヴェール」は、社会的立場については機能しても生まれ持った性別については機能しないため、性別に関わる不正義が無視されてしまう
2. 正義の原理が適用されるのはあくまで社会制度や政策のレベルであるため、家庭内の不正義が無視されてしまう
3. 正規雇用を前提する形で福祉政策が組み立てられているため、多くの女性がおかれた非正規雇用の貧困の問題が無視されてしまう

（4）センの「ケイパビリティ」の考え方として適切なものは次のうちどれか。

1. その人が有する、未だ実現されていない秘められた才能や未知の可能性のことを、センは「ケイパビリティ」と呼んだ
2. その人の、できることやなれる状態という形で把握されたこれまでの生活の実態を、センは「ケイパビリティ」と呼んだ
3. その人が実現できる生活のあり方の幅、という意味での自由の大きさのことを、センは「ケイパビリティ」と呼んだ

(5) 人々の間に正義を実現するにあたっては適切な承認プロセスが重要だ、とホネットが考える理由として、適切なものは次のうちどれか。

1. いくら正義にかなった制度を設計しても、人々がその制定プロセスを正当なものだと承認しなければ、制度は機能しないから
2. 個別の人間関係においてお互いを承認する良好な関係を築くことができているならば、制度的なサポートは不要になるから
3. 他者からの承認が損なわれた状態では、人はたとえ法的な権利や実際の機会を有していても、それを行行使することができないから

◆以下の各問いについて、選択肢から適切なものを全て選ぶ形で解答してください（1問5点、完全正答のみ得点とする）。

(6) センが考える人間のアイデンティティの特徴として適切なものは次のうちどれか

1. ある個人がもつアイデンティティは一つではない
2. アイデンティティには当人が気づいていないものもある
3. アイデンティティは人生の中で変化することもある
4. 近年、宗教的なアイデンティティの持つ価値は低下してきている

(7) 正義についてのセンの「現実志向の社会比較」アプローチの考え方として適切なものは次のうちどれか

1. 大切なのは世の中の不正義を減らしていくことであり、完全な正義を実現することではない
2. まずはじめに「明白な不正義」とは何かについて同意し、そこからさかのぼって明白な正義の原理を導出するのが適切である
3. 正義はつまるところ現実の社会問題を解決するためにあるのだから、哲学的に理論を組み立てたりせずに、はじめから個々の政策を比較していくべきである
4. たとえ文化や歴史の違いはあっても、それぞれの社会のあり方を丁寧に比較していけば、単一の正義に到達することは不可能ではない

(8) ロールズとセンの平等主義リベラリズムの共通点として、適切なものは次のうちどれか。

1. 人々の価値観には多様性があるということを前提として、そのような多様性を尊重するような社会の仕組みを検討する
2. 全ての人が納得できる社会の仕組みを導出するために、社会契約論の枠組みを用いて考える
3. 人々の置かれた境遇を評価する上で、どれだけの財を保有しているかではなく、保有している財を用いてどれだけのことが実現できるかに注目する
4. 正義にかなった社会の仕組みを検討する上では、単一の視点から考えることによる偏りを是正する必要があると考える

(9) 以下の政治哲学的な立場のうち、国家による格差是正に賛成するものはどれか。

※格差是正のための政策の具体的な内容については意見の相違があるとしても、国家介入を用いて社会内の格差を是正するという基本方針には同意するならば「賛成」とする。

1. 平等主義リベラリズム
2. リバタリアニズム
3. コミュニタリアニズム
4. 第二波フェミニズム

(10) この授業で扱った様々な理論が、それぞれの主張の違いはあるにせよ共通して目指していた目標として、適切なものは次のうちどれか。

1. 社会の様々な場面において正義を実現することで、いまよりもっと多くの人を幸福にすること
2. 自由と権利が人々にとっていかに重要かを明らかにすることで、共産主義を否定し、アメリカの優位性を立証すること
3. 社会の中の一部の人が一方的に不利益を被ることがない、という意味で正義にかなった社会のあり方を明らかにすること
4. 私たちの暮らす社会が今どうなっているかではなく、どうあるべきかを問題とし、これを論理的に明らかにすること

解説

期末テストはオンラインで実施した。選択式の設問を通じて、授業内容の理解度を確認した。選択式というと簡単なものと捉えられがちだが、それは必ずしも適切な認識ではない。特に後半の五問のように、適切なものを複数選び解答するタイプの問題においては、安易な消去法で正解を導くことはできず、正確な理解が必須となる。全問正解（50点）は1名のみであった。

正答は順番に3、2、2、3、3、1&3、1、1&4、1&3&4、3&4となる。

先に小テストを二回、それぞれ30点満点（同様に選択式で5点×6問）および20点満点（同様に選択式で5点×4問）で実施しており、3つのテストの合計点をそのまま最終成績とした。

以上